

あらすじ
「大蛇に魅入られた娘おいのの物語」
～新宮浮島の森伝説～



「好いた同志のうれしい首尾で 心浮島ひとめぐり」(新宮節より)

むかしむかし、新宮は浮島の森のあたりに「おいの」という美しい娘が二親と幸せに暮らしていました。「おいの」の父は、樵きこりでした。父のもとへ、毎日昼の弁当を届けるのが「おいの」の役目です。ある日のこと「おいの」は、いつものように弁当を届けに行きました。一緒にご飯を食べようとしたところ箸はしを忘れたのに気づき、森の中へアカメガシワの枝を手折りに行きました。アカメガシワの枝は、お箸にするのにちょうどよかったです

森の中は、うっそうとして生ぬるい風が吹いていました。

ベキッ！メリメリ！ 物音にわれにかえると、黒い大蛇が目の前に鎌首かまくびをもたげているではありませんか。「おいの」は息をのみ声も出ませんでした。

大蛇の口は、般若はんにやの面のように裂け、赤い舌がチロチロと動く怖ろしい姿です。

大蛇は、すぐに「おいの」を食べようとはせず、その大きな口に「おいの」を咥くわえるると沢の茂みおのれ 己すみの棲み処かじゃ「蛇の穴がま」へゆっくりと姿を隠してゆきました。

急を知り、妻とともに再び森に引き返した父は「蛇の穴じや がま」と呼ばれている沢の片隅の穴のそばで両手をつき「せめて、娘の姿をもう一度みせて下さい」と、くり返し願い叫びました。

一陣の風が吹き起ったかと思うと、大蛇が美しいままの「おいの」を咥えて姿を現しました。「おいの」は、心なしか微笑んでいるように見えました。

そして別れを惜しむようにゆっくり沈んでいき、二度と再び、姿を現しませんでした。

昔は年を経て、美しい娘おいのは、池の主に魅いられて花嫁となったのだと、大蛇のいけにえになったのだとも伝えられています。

しかしそれ以来変わらぬは、新宮熊野では、アカメガシワを箸の代りに使わなくなったと伝えられていることです。

「おいのみたけりや蘭の沢いのりどへござれ おいの蘭の沢いのりどの蛇の穴じや がまに」



あらすじ作文 杉山みかん
著作権 紀州の民話をオペラに実行委員会